

『恋におちる、キスの瞬間』

著：小塚佳哉

ill：沖麻実也

それにしても、吐息を感じるほど間近で見ても、やっぱり榛名はハンサムだった。

こんなにきれいな顔立ちは、生まれて初めて見たと思う。きれい、といっても女性的な部分はない。くっきりした眉は形がよく、すっと通った鼻筋や少し肉厚な口唇も引き締まっていて、男らしくて凜々しい。ただ、薄茶色の瞳はいつも明るく輝いているが、何を考えているのか、まるで読み取れず、ちょっとミステリアスだ。

そんなことを考えていると、その整った顔が近づいてきて、ふっと視界が暗くなり、理友の口唇の上に湿った感触が重なった。

(……え?)

経験のない理友には、それがキスだとわかるまで、しばらくかかった。

理友はキョトンとしたまま、ほんの一瞬だけ重なって、すぐに離れた榛名の顔をまじまじと見つめてしまう。目の前にある、ちょっと肉厚でセクシーな口唇が、たった今、自分の口唇と触れた瞬間を、何度も頭の中でリピートする。

すると、黙って見つめ返すばかりの理友に問いかけるように榛名が首を傾げた。

その仕草に促されて、理友は上擦った声で呟く。

「……今の、キス？」

「いや、今のは挨拶みたいなもんかな」

「挨拶じゃないキスもあるの？」

オウム返しに問い返すと、榛名が困ったように微笑んだ。

そして再び、理友の顔を覗き込むように榛名の顔が近づいてきて、まるで凍りついたように動けなくなると、シートに押しつけられ、もう一度、ゆっくりと口唇が重なってきた。

「……んっ」

息ができなくなった理友は、口唇を噛みしめた。

そっと口唇の上を舐められて、生温かい感触に戸惑い、どうすればいいのかわからないまま、息苦しさで喘ぐと、歯列を割るように熱い舌先が口の中に滑り込んでくる。

「ん……はあっ、あっ」

喉の奥に逃げ込んでいた舌先を探り出されて吸い上げられると、口唇の間から吐息とともに、どちらのものともわからない唾液があふれてしまう。理友は抗うように嫌々と首を振ったが、どうやっても逃げられなかった。しかも舌先を吸われると目眩がして、吸い上げられるたびに、身体の奥がジンと疼く。こんなことは生まれて初めてだった。

混乱した理友が救いを求めるように手を伸ばせば、その手首をつかまれ、指を絡めるように手のひらが重なって、熱い体温を感じた。理友だけでなく、榛名の手も熱いことに気づくと、さらに鼓動が速まってしまう。

強く舌を吸われ、口の中まで舐め回され、初めて教えられた淫らな感覚が背筋を走り抜けて、まるで貪られるような、そんな荒々しいキスに理友の意識が遠くなった頃——不意に、口唇が離れた。

キスは始まった時と同じくらい、唐突に終わっていた。

大きな瞳を見開いたまま、放心状態になってしまった理友に、榛名は自嘲するような苦笑を浮かべながら囁く。

「理友が、いろんなことに興味を持つ好奇心旺盛な年頃だっていうのはわかるが、世の中には悪い大人も多いから、二度とおかしな友だちの誘いには乗らないで、これからはもっと自分を大切にしろ」

いいな、わかったな、と念を押すと、榛名は助手席側のドアを押し開けて折りたたみの傘を開き、理友の手に持たせた。

大きな手のひらに促されて、理友が押し出されるように車を降りると、開いた傘に当たって雨音が大きくなり、一気に現実に引き戻されるような気がした。

だが、いまだにキスの余韻に夢見心地になっている理友が振り返っても、もうドアを閉めたマセラティは雨の中に走り去っていた。

(……な、なんだよ、これって)

理友は混乱するばかりだった。車を降りてから、どうやって寮に戻ってきたのか、まったく思い出せないくらいだった。それでも寮の正面玄関にたどりついて、傘の雫を払っていると、まるで待ちかまえていたように五十嵐が階段から下りてくる。

「おかえり、今井、どうだった？」

「……あ、ああ」

「会ってきたんだろ、なあ？」

ちょっと小太りの五十嵐は足早に近づいてくると、理友に声をかけながら、人のよさそうな丸顔でニヤニヤと意味ありげに笑いかけてきた。いかにも、いたずらが成功したような表情が腹立たしくて、理友はわざと笑顔を作ると、まっすぐに五十嵐の顔を見つめ返した。

「うん、会ってきた。可愛い子を紹介してくれてありがとう」

そう答えれば、そんなはずはない、というように五十嵐は絶句する。

ふん、ざまあみろ、と心の中で舌を出した理友は、五十嵐の横を通り抜けて階段を上ると、二階にある自分の部屋に入って、ベッドに倒れ込んだ。窓の外からは、いっそう激しくなった雨音が響いてくるが、それも聞こえなくなるほど、理友はベッドで手足をバタバタさせながら悶絶する。

まんまと自分を引っかけてくれた五十嵐を、絶句させたのは気分がよかった。だが、榛名に入れ知恵されたままに答えてしまったことが忌々しい。それが効果的だっただけに、いっそう腹立たしかった。

そう思ってから、ベッドに転がった理友は大きく舌打ちした。

いや、違う。そんなことは、どうだっていいのだ。五十嵐に引っかけられたことなど、もうどうだってよくなっていた。自分が今、怒っているのは榛名のほうだ。

(……ななな、なんだよ、あれはッ！)

理友はベッドに突っ伏したまま、いまだに熱い、湿った感触が残っているような自分の口唇を両手で押さえ込んだ。

(キキキキキ、キス、しちゃったよ、オレ……しかも、男とッ！)

あれがファーストキスだった。

本当に、生まれて初めてのキスだったのだ！

未成年は守備範囲じゃないと、そう言っていたのに！

悪い大人も多いから自分を大切にしろ——まことしやかに、そう言った同じ口唇が、理友のファーストキスを奪っていったのだ。

(わ、悪い大人ってなんだよ、それって自分のことじゃんかっ！)

ホモのくせに、あ、ホモじゃなくてバイだったけど、と自分自身に突っ込みを入れながら、理友はベッドの上でゴロゴロと転がり続ける間も口唇を押さえていた。

初めてのキスの感触が、いつまでたっても口唇から消えない。

今も歯列を割って滑り込んできた肉厚な舌先の、湿った感触を生々しく思い出せる。きつく舌を吸われ、ジーンと身体の奥が疼いてしまったことも。

あんなふうにしたのは、本当に生まれて初めてだったのだ。

(……は、榛名さんのバカ！)

罵ってみても、まぶたの裏に浮かんでくるのは、榛名の笑顔ばかりだ。

優しい笑顔を思い出しながら、悪態をつくのは意外と難しかった。怒っているはずなのに、なんだか憎めない。ハンサムって本当に得だよな、と忌々しく思いながら、あらためて理友は自分の口唇を指先でなぞった。

榛名がしてくれたように、そっと。

その感触に甘い記憶が甦って、思い出しているだけで、また身体が熱くなってしまう。

目を閉じた理友はベッドに転がったまま、生々しく残っているキスの記憶に身を委ねながら、しみじみと呟いた。

「……そっか。あーゆーのが、忘れられないキスっていうのか」

本文 p27～34 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>